

は し が き

本年度の研究報告の一つとして「研究報告第九十七号」を刊行いたします。

この報告は、小学校と中学校の国語科学習指導上の問題点から解決を図るべき一つの観点を設定して、当教育センターの所員が取り組んできたものをまとめたものです。仮説の検証に際しては、小学校、中学校ともそれぞれ実際の授業で実施していただいて考察の資料を得ました。

国語科は「言語の教育としての立場を一層明確に」することが教育課程の基準の改善の基本方針に述べられて以来、この趣旨を受けた施策や実践が広く行き渡っていることは誠に喜ばしい限りです。「読む」ことの指導においてもこのことは例外ではありません。叙述に即して読み取る能力を養うための指導が様々に工夫されていることは周知の通りであります。

一方、「読む」ことにおける内容の享受面について見ますと、一つの問題点を見出すことができます。それは、理解すべき事柄であるとして内容が学習者に一様に押しつけられたり、他人の読み取り結果を恰もすべての読者の読み取り結果であるかのような処理をされたりする恐れがないばかりではない、ということです。そこでは、読者の個性的な反応が無視されてしまうこととなります。この報告は、そうした懸念を払拭するための一つの手だてについて考察したものです。読者が自主的に読みを進めて、主体的に受けとめることができるような読みの課題の在り方について言及しています。限られた時間の中でのまとめですから、考察が不十分な点もあるうかとは思いますが御一読の上ご意見ご批判をいただければ幸いです。終わりに、本報告をまとめるに当たり快く御協力をいただいた新潟市立大形小学校横山恵子先生、柏崎市立第一中学校庭山正弘先生、藤田克子先生、近藤千鶴子先生に敬意と謝意を表すとともに、両校の校長先生はじめ諸先生方に心からお礼を申し上げます。

昭和六十三年三月